

フルートと子ねこちゃん

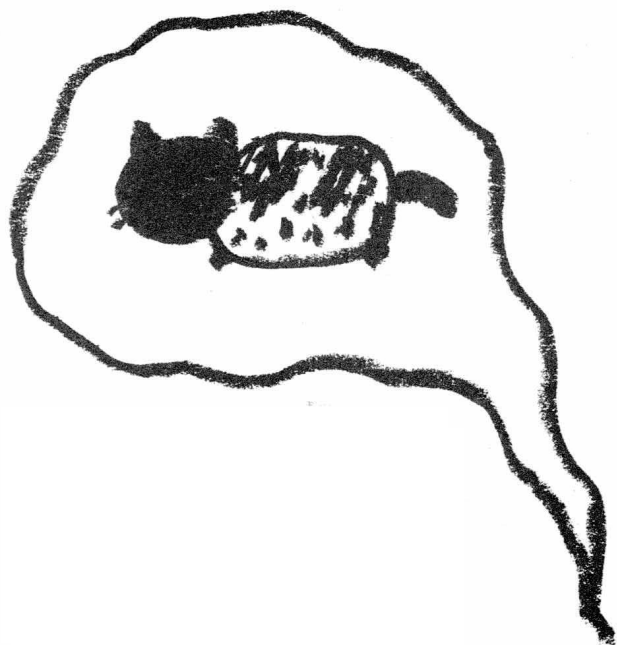
今江祥智 長新太 絵



現代子ども文学選 15

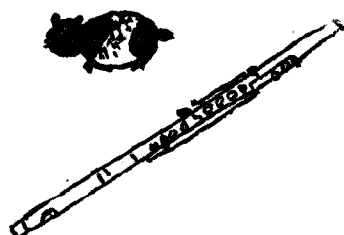
フルーツと子ねこちゃん

今江祥智＝作 長 新太＝絵



フルートと子ねこちゃん

現代子ども文学選 15



* 著 者

いま え よし とも
今 江 祥 智

* 発行者

岡 本 陸 人

* 印 刷

新興印刷製本株式会社

錦明印刷株式会社（オフセット）

* 製 本

中村製本株式会社

* 発行所

株式会社 あかね書房

東京都千代田区西神田 3-2-1 〒101

電話 東京 263-0641 (代)

1974年12月 5 日第 5 刷

NDC 913

8393-14515-0027

今 江 祥 智

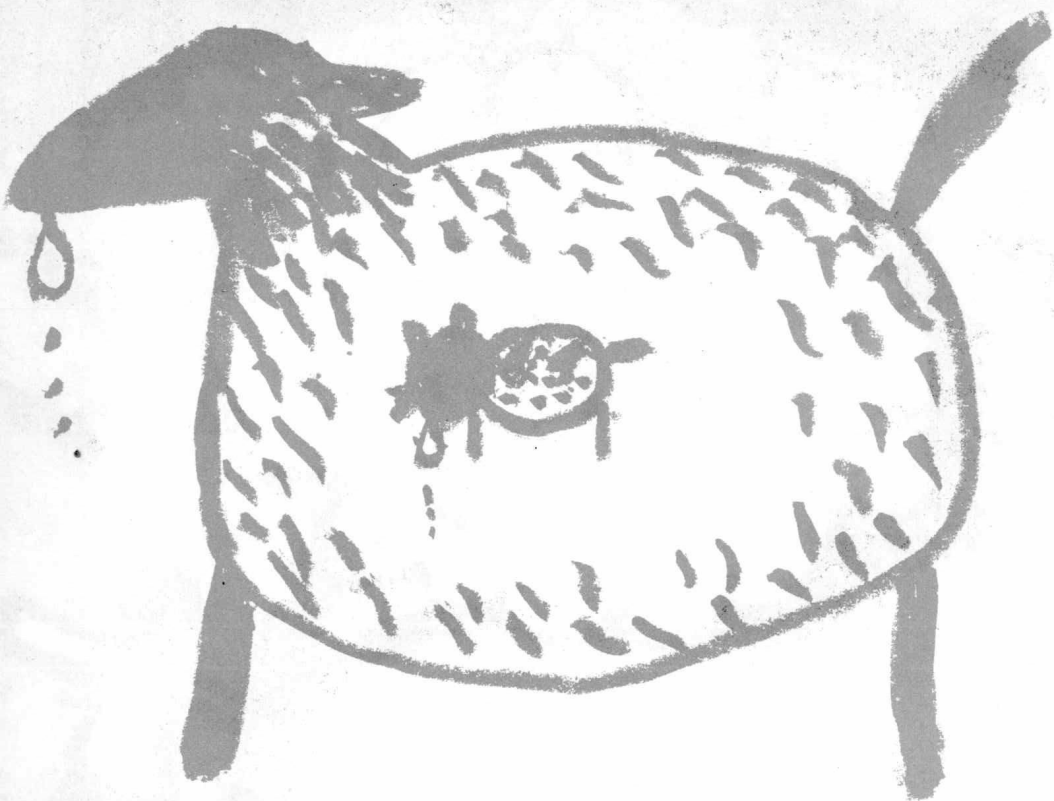
フルートと子ねこちゃん

あかね書房 1974

129p 22cm (現代子ども文学選 15)

©1973 Printed in Japan 著者との契約により検印なし

定価はカバー（ケース）に表示してあります



はじめに

モモタロウって、知^しってる——ね。

ウラシマって、知^しってる——ね。

フルートって、知^しってる——ね。

モーツアルトって、知^しってる——ね。

でも、この四つのものは、おたがいに、

かんけいない——みたい、だって……。

ところが、そうではないんだな。

まあ、読^よんでみてください。

もくじ

夕暮れにはじまる
ゆうぐ

—— はじまり * 6

1 ウラシマとモモタロウ * 12

2 鏡の中のじぶん * 23
かがみ

3 「将」と馬と犬とねこ * 35
しょう うま

4 林のモーツアルト * 46



5 ピアノかフルートか* 58

6 フルートか友だちか* 71

7 二つのご対面* 83

8 フルートと子ねこちゃん* 103

夕暮れにはじまる

—— おしまい* 114

あとがき* 128

そうてい・さしえ／長新太

■著者紹介Ⅱ 今江祥智^{いまえ しょうち}



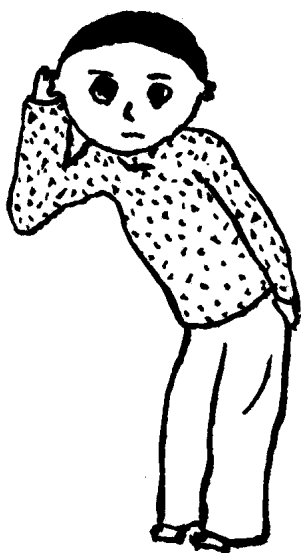
一九三二年大阪に生まれる。
同志社大学英文科卒業。中学
教師、編集者を経て、現在京
都の聖母女学院短大で児童文
学を講じながら著作に従事。
著書に、少年文学「山のむこ
うは青い海だった」「海の日曜
日」「さよなら子どもの時間」、
童話「あいつとぼくら」「きみ
とぼく」、童話集「ぼけっとな
お祭り」「夕焼けの国」、絵本「あ
のこ」、評論集「子どもの国か
らの挨拶」ほか多数がある。

■画家紹介Ⅱ 長新太^{なが へんた}



一九二七年東京に生まれる。
一九五九年、絵本「おしゃべり
なたまごやき」で文芸春秋漫
画賞を、六〇年、イタリアの
国際まんがサロンで国際漫画
賞を受賞。児童図書の作品は、
絵本に「どうぶつあれあれえ
ほん」「海の中のきりん」「たい
へんたいへん」、挿画に「いた
ずらラッコのロッコ」「きみと
ぼく」「うみのしろうま」ほか
多数。エッセー集に「海のビー
玉」ほかがある。

フルートと
子ねこちゃん
*今江祥智





夕暮れにはじまる——はじまり

林の枯葉を金色にそめていた夕やけのおしまいの光が消え
ると——それをまっていたように、林にむかって、二つの声
がよびかけます。

さいしよは、まだ若い女の人の声が、

——モモタロオオオ……。

そして、つぎは女の子のすんだ声で、

——ウラシマアアア……。

するとまた、その声をまっていたみたいに、黒い大きなか
げと小さなかけが、林の中からとびだしていつて、声のした



家に走りこんでいくのです。

すると、近所の人は、

（ははあ、六時十分だなあ……。）

と、うなずきます。

それほど、二つの声は毎日きまった時刻によぶのでした。

雨の日でもかわりません。雪の日もおなじです。

さいしよは、

—モモタロオオオ……。

つぎが、

—ウラシマアア……。

そして、大きなかげと小さなかげが、林の中をとびはねて、

家のほうへ……。

ですから、近所きんじよの人ひとも、その二つのかげのことを、ずつと、二ひきの犬だと思ひこんでいました。二ひきとも無口むくちな犬らしく、ほとんどなくことはありませんでしたし、ほんのときたま、太ふといこえいいい声こゑが、

ウン……。

と、つぶやくのをきくくらいでしたから、むりもありませ
ん。

そして、モモタロウにウラシマというのですから、一ぴきは、まるまるふとった子犬、もう一ぴきを、白いおひげのとしより犬だろう……と思っていたのもまた、むりのないことでした。

✱





声の主たち一家が、その林の家へひっこしてきたのは、お正月のことでした。

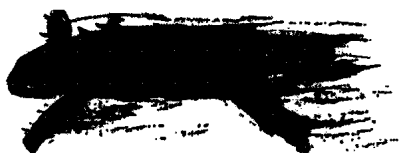
お正月のぬくもりの中にいた近所の人は、正月早々にひっこすなんて、かわった一家だなあ……と思ったくらいで、その一家のことも、ましてや、そこに飼われている犬のことも、あまり気にもかけずにすぎました。

はじめて、

—モモタロオオオ……。

—ウラシマアアア……。

をきいたときは、おやあ、と思い、それが、犬をよぶ声らしいとわかったときは、みんなきまって、ふふふふ……と、わらってしまいました。



けれど、すぐにその声にもなれてしまうと、気にもとめなくなりしました。そして、お正月がおわったところには、その声を
夕方ゆうがたの時報じほうがわりくらいにきくようになっていました……。

*

ところがある日、林の前の道をつきあたったところに住む
中田なかたさんの奥おくさんは、ウラシマタロウに会であって、二重じゅうにお
どろいてしまいました。

だって——いや、みなさんにも、とにかくウラシマタロウ
に会っていただきましょう……。



1 ウラシマとモモタロウ

—まああ、道のまん中でねそべったりして、のんきなねこちゃん。
中田さんの奥さんは、思わず大きな声でひとりごとをいってしまつて、
あわてて口をおさえ、あとは口の中でつぶやくだけにしました。

—……それにしても、見かけないねこ。どこのかしら……。

ひるさがりののんびりした気もちがそうさせたのか、中田さんの奥さんは、かがみこんで、その見かけぬねこの人相をたしかめ、ついでに頭をなでようと思いました。そのとたん、

—ウニャオン！

ねこは、はじかれたようにとびおきて、ほえたのです。こんどは、中

田さんの奥さんがとびあがるばんでした。

—あらやだ、ほえたわ。

奥さんは後じさりしながら声を大きくしました。それから両手をふりかざして、ねこをおどしてやりました。

ところが、ねこのやつは平気で、背をまるめ、毛をさかだててもういちど、そんな奥さんに、

—ウニャオン！

と、ほえたのです。

—き、きみわるいわ。だれか——だれかああ……。

奥さんの声は、高らかなソプラノにかわりました。

すると、すぐ道の横の家のまどがあいて、きいたことのある声が、

—およし。ウラシマったら、また！

